

「ホタルイカ(下)」 想像を超える回遊範囲

生まれは若狭、山陰沖？

前回、若狭湾や山陰沖の底曳網による漁業の開始に伴う資源管理の必要性を説いた。この点については、遠く離れた海のことなのに、なぜ富山湾に関係があるのかと疑問を持たれた方がいるに違いない。

実は最近の研究で、富山湾のホタルイカが若狭湾や山陰沖で獲られるものと無関係ではないことを示す証拠が得られ始めたのである。その一つは、夏から秋にかけて、生まれて2~3ヶ月の子供のホタルイカが、日本海の真ん中から遠く津軽海峡の沖にまで、大量に分布している事実である。以前からホタルイカの卵は若狭湾や山陰の沖で多いこと(実に富山湾の百倍もある)が分かっていた。さらに最近の研究で、ホタルイカの卵や幼生は海流とともに東へ移動していることが明らかになった。

夏から秋、日本海の真ん中に多くいる子供ホタルイカは、量が莫大なことと、卵や幼生の分布の様子から、若狭湾や山陰沖で生まれた可能性が高いと考えられる。その上に、一年前の山陰若狭沖の水温変動と、富山湾の漁獲量の変動に関係があることも分かった。

これらの事実をつなぎ合わせると、富山湾で生まれたものが富山湾に戻ってくることは否定できないが、山陰や若狭沖で生まれたものが多く富山湾にも入り込んでいる可能性が高い。つまり、ホタルイカが冬から春に産卵のため接岸する時、分布が能登半島のはるか東にも達していることから、一部が富山湾に入り込むことが十分に考えられるのである。

ホタルイカは、今まで考えられていたよりもはるかに広く回遊し、富山湾だけが独立しているとは言えない。ホタルイカの資源管理を、日本海全体で考えなければならぬゆえんである。(内山勇)



能登半島より北200キロ沖の日本海で夏に採集されたホタルイカの子供